

モダニズムの絵画  
～ 抽象表現主義以後～  
クレメント・グリーンバーグ

司会者: 佐藤奈央 記録者: 桑原 翔  
発表者: 小原章史, 田中茂裕, 元島瑞貴

論点1. “帰る場所”と「再現性」について

田中: “帰る場所”がある、とは絵画に「再現性」があるということ。(ex. ペンがあって、それを「ペンだ」と再現する)当時の画家たちはその絵画における“帰る場所”をあまり意識していなかったようだが、その絵画の“帰る場所”が暗示され、示唆されすぎているために、グリーンバーグの言うところの絵画に対するある種のマンネリが起ってしまう。

池戸: “帰る場所”がある = 再現性がある という方程式があるなら、文献 p.58、59 で書かれている「帰る場所なき再現性」についてはどう理解すればいいのか？

再現性 平面上において立体的、三次元的なイリュージョンを観者に引き起こす ??

森村先生: 平面の中に三次元性が表現されていると観者は必然的に「再現」してしまう。それが示唆されすぎていると、観者は三次元性を受け取るだけでなく「それが何か」をも分かってしまう。ヒントが多すぎる。「元が何か?」「何が描かれているか?」という思考から抜け出せない。

抽象絵画は二つに分類される

幾何学的に形をもつ抽象化

形をもたない抽象化

形をもつと、観者はそれから三次元的な再現をしようとする。

Cf.) ジャスパー・ジョーンズの「星条旗」の絵は、元ネタ (= 帰る場所) が二次元的なものであるにも関わらず、それを絵の中で三次元的に描く。

我々はその「何か」が描かれている時、それが「何か」を理解しようとする脳の働きを止めることが出来ない。たとえ“帰る場所なき”絵画だとしても、その中に隠されている「何か」を見つけようと、我々は必死になって、近づいては遠ざかり、ナナメを向いては目を細めたりする。絵の中に何か目に見えないものが込められるようになっていたなら、それはコンセプチュアル・アートのハシリなのかも知れない。

我々は観者として、「再現」することにとらわれすぎず、作品の本質を享受することが重要。

論点2. “抽象表現主義の絵画を見て”

---

森村先生：今回“抽象表現主義絵画”をいくつか見てきましたが、皆さんは率直にこういう絵画についてどう思っているんでしょうか？皆さんはこういう絵は好きなんですか？

田中：イヴ・クラインの「青」を初めて見たときにとっても印象的に思った。

小原：ジャクソン・ポロックなど、テートモダンに初めて触れた時は、「こんなのもいいのか」と感銘を受けた。

元島：抽象表現主義の絵画はあまり好きではない。理由としては、見ていて不安な気持ちになるから。抽象化がエスカレートしていくと、その先に待っているのは？

佐藤：キライではない。ただ自分の中に「モダンアートの方が格好いい」という理念がある。

桑原：もちろん好きだが、誰もが真似しやすいアートであるから、その価値はやや信用できないともいえる。抽象表現主義には独特の「オシャレ感」があるような。

小川：自分は絵画を見てこなかった。ある日、「3割は損してるよ」と言われる。「何ィ!？」その後には割りと絵画に触れているが、抽象表現主義についてはいまいちピンと来るわけでもない。

小林：全体的な傾向に好みはなく、ちがう分野の作品でも、その作品作品で好き嫌いがある。一概に抽象表現主義がどうか、という判断もしがたい。自分のモノづくりのヒント探しとして作品を見ると、そうでなく単に鑑賞するときでは、評価がまるで違う。自分としては、パッと見て、「ああ、綺麗だ」と思えるものは、たいてい好き。(ジェスチャー付き)

鯨井：SA中にスペインはマドリッドにて、初めていわゆる抽象表現主義にであう。しかし、あまり好まない。それでも、ピカソなどの作品には好感を抱く。

池戸：「俺、暗い絵とか、暗い歌とか好きなんですよね。」

森村先生：若かれし頃、新聞の半面に印刷されている抽象表現主義絵画に衝撃を受け、思わず切り取って壁に貼ってしまう。その後も幾何学的抽象絵画に触れ続け、カンデンスキーなどの作風は気に入っている。その当時は、デパートや百貨店で美術展が盛んに行われてはいたものの、その殆どがゴッホやセザンヌ、エコール・ド・パリやバルビゾン派など、教科書に載るような、いわゆる有名どころの展示ばかりで、抽象絵画などに関しては、あまり触れる機会がなかった。抽象絵画に出会った時は、率直に、「ああ、こんなんでもOKなんだな」と、痛感。その瞬間に若き森村修は教科書からの脱却を図る。

川村先生：抽象表現主義の絵画はある意味ではポスターのようだ。平面性にこだわるなら、とことんこだわらなければ、その意味が薄くなってしまいかも。しかし物理的劣化を免れない。

疑問点：アートは今も「連続性」を持っているのか？

---

アートが今も地球上に生き残っていることはある意味では連続しているということかもしれないが、アートはある種の周期をたどっているだけなのかも知れない。多様化がますます進む現代のアートでは、その前後に連続性を見出すことが、困難になり始めている。

記録後記：平面性と三次元的な作品についての考察

---

抽象表現主義の絵画では、その平面性がとことん追求された。それは観者が不必要に再現することを防ぎたかったのか、嫌ったのか。極限まで平面の可能性を追求してから、平面としての絵画の限界のようなものが、アーティストたちに、三次元すなわち立体アートを作らせるにいたったのだろうか。だとすれば、そこに連続性はあるのかも知れない。議論中にも述べたことだが、ゴッホの油絵は、二次元なのだろうか、それとも三次元なのだろうか。もちろんゴッホの描く風景画は擬似的な奥行きを持っているために、平面性を追求した作品であるはずがない、のだけれど、再現される立体感の他に、その作品自体が持つ立体的要素については、それをアートの価値基準の中に取り込んでもよいのだろうか？写真で複製されないもの　筆のタッチが生きている絵の具の凸凹やアクリルの匂いなど、実物を見ないと分からないものの価値が見出されているからこそ、美術館の存在意義が今日も尚生き続け、図書館やスクリーン画面に執って変わられることのない鑑賞ができるのかも知れない。その時、我々はゴッホの作品が、絵なのか、それとも彫刻なのか、分からなくなってしまうだろうか。どれだけ平面にこだわっても、作品と観者の物理的な距離感があるときは、それを空間と捉えざるを得ないことは、平面性の終焉を示唆しているようにも思われるが、確証は持てないし、これが論議を必要とすることか否かも疑問。以上に述べたことは、私のただのボヤキである。